赤尾元会長のお別れの会

～日々の暮らしの中から①～

山口放送の元会長、赤尾嘉文氏のお別れの会が8月5日、ホテル・サンルート徳山で行われた。

赤尾氏は5月25日に92歳で亡くなられた。お別れの会には約700人が参列し、在りし日を偲んだ。

昭和31年に開局した山口放送。昭和40年前後は全国各地にある民間放送局は極めて労使関係が悪かった。

山口放送も例外ではなく、昭和42年にはロックアウト。赤尾氏は労務担当、昭和37年に入社した私は労働組合の役員として対峙した。

余りにも激しい対立で、私は体を壊して約1年間入院。アナウンサーをやめ、復職後は、組合とも離れてラジオ番組の制作をする。写真は日本民間放送で最優秀を受賞した時のものである。

結局43年間山口放送にお世話になったが、私の次女と赤尾氏のお嬢さんとは同じ幼稚園だったこともあり、お嬢さんとも晩年親しくなる。

徳山中央病院から医師会病院に転院され、お見舞いに行くと、私の手を握り「お互いにがんばろう」と励まし合っただけに、その死が惜しまれる。

お別れの会のパンフレットに掲載された赤尾氏

赤尾氏は山口放送の会長としてだけでなく、各分野の人々とも親交があり、お別れの会では染色家の飴村秀子さん（現・防府市在住）や二井前山口県知事ご夫婦、私の親友でもある山口市の弁護士の末永汎本氏とも顔をあわせた。

お別れの会といっても私にとっては昔からの組合員仲間や同期との再会の場になった。こんなお別れの会を企画・実施してくれた山口放送にもこの場をかりて御礼申し上げたい。

人は誰でもこの世と別れを告げねばならぬ。その時、在りし日の立場を離れ、誰もが感謝して別れを告げることが出来るのは、その人の人徳がもたらすものだろう。

8月5日の「お別れの会」のスナップ

赤尾氏のようには無理であろうが、これからの残った人生を大切に生きていたい。

早いもので、お別れの会から2週間が過ぎた。丁度、お盆と重なったため死について考えさせられた。赤尾氏は92の歳の長寿、それだけ与えられた命を大切に色んな意味でこの世に貢献された。それは個人の名声と権力に関係なく学ぶべきものがある。

やゝもすれば老いると、もう生きているだけになりがちだが、前に向かって生きる限り、その年齢なりに色々なことが出来るように神は私を導いて下さっているように思う。赤尾氏とのお別れも、自分に少しでも役立ち、参考にしながら残された一日一日を輝いて生きたい。そこには苦しいこと、不幸なこととしか思えないことがあっても、その中に意味を見出し、次のステップへとゆっくりとではあるが足を進めて行きたいと思うのである。

日本民間放送番組コンクールで最優秀賞を受賞した時、赤尾氏と共に